

目的 宮崎県の縄文彌生古墳時代の出土品の文様について調査分類し、現在の服飾の模様に関連づけることにした。

方法 原始時代の生活の中の工芸即ち用具彫刻絵画等を調査するために、県博物館をはじめ、はにわ館、延岡市内藤記念館等所蔵の土器類を撮影、スケッチ、拓影として縄文彌生古墳時代と大別分類した。次に写真スケッチ拓影の工作的分類を行って五模様にした、五模様とは直弧文、三角文、円文、渦文、条線文である。

結果 縄文時代前期は直線曲線円文と各々が単独に描かれていた。後期から彌生時代にかけては直線曲線円文等反復して、やや複雑になり図案化されると同時にある程度まとまっている。即ち全体としての調和がとれてそれぞれのバランスがくずれずに配置されていた。古墳時代のものは文様としての資料は少なかったが全体の形姿の美しさを表現したものが多く、例えば、須恵器の形姿を形造っている線の美しさ等である。この調査の結果宮崎県においては縄文時代の土器及びそれに付けられた文様が豊富であることがわかった。なお、この文様は一般に単純な文様であって、きわめて素直な人間の心の表れである。又生活の中から生れた偽りのない心の表示であって多くの人々のすぐれた意匠構成がわかった。そして中には形や構成を変えて次の時代の基礎的役目をはたしたものもあり、現代人にそのまま受入れられて伝統的な柄となり流行に左右されずにいつの時代にも飽きのこない普遍的な柄として服飾界の基盤をなしているものも数多くあることを知った。